

	[11]
氏 名	三宅 貴久子
博士の専攻分野の名称	博士（情報学）
学位記番号	情博第 61 号
学位授与の日付	2018 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	社会文化的アプローチから捉える思考力育成の授業デザイン —日本と中国の授業実践を事例として—
論文審査委員	主査教授 久保田 賢一 副査教授 黒上 晴夫 副査教授 久保田 真弓

論文内容の要旨

三宅 貴久子氏の論文「社会文化的アプローチから捉える思考力育成の授業デザイン：日本と中国の授業実践を事例として」は、序章と終章を含む全 7 章からなる。

- 序 章 本研究に至るまでの経緯
- 第 1 章 社会文化的アプローチからみた思考研究の課題
- 第 2 章 アクションリサーチから捉える「学習者の思考を促す授業」
- 第 3 章 研究の目的と方法
- 第 4 章 日本と中国の授業場面の組織化
- 第 5 章 日本と中国の授業実践の変容 —TEM を活用して—
- 終 章 まとめと課題

以下、各章の要旨をまとめる。

序章では、社会文化的アプローチに関心を持つようになり、研究を行ってきた経緯について述べている。三宅氏は、小学校教師として長年、思考力の育成を研究テーマにして授業実践に取り組んできた。とくに、関西大学初等部に移籍してから 6 年間、思考力育成に向けて初等教育全体のカリキュラムづくりに力を注ぎ、思考力育成に関するリーダー的な役割を果たしてきた。しかし、思考力を育成するためにシンキングツールやルーブリックを導入するだけでは、文脈を考えず効率ばかりを求めるアプローチになっているのではないかと違和感を持ち、それが本研究に取り組むきっかけとなった。また、中国との共同研究に関わってきたことで、学習者の置かれている文脈の重要性を認識し、授業デザインの新しい視点として、社会文化的アプローチに関心を持ったことが、本研究を深めることにつながった。

第1章では、「思考力の育成」のこれまでの研究成果を振り返り、その課題について明らかにした。キー・コンピテンシーやPISA型学力に注目が集まり、知識基盤社会における資質・能力のあり方、とくに思考力に関して多くの研究が行われるようになった。しかし、思考力の定義が研究者によって大きく異なるために、学校現場において教師が授業で活用できるための思考力育成の方法論が開発されていない。思考を行動レベルで捉え思考スキルという概念を導入し、手順としての思考スキルを学習する方法論が開発された。この考えをもとに、シンキングツールという思考を促す道具を導入し、学習カリキュラムの開発を行った。しかし、この方法では、思考を、個人における「文脈から切り離された内的な情報処理過程」として捉えていることになり、問題があると指摘した。そして、思考を単に情報処理過程とするのではなく、周りの人や人工物との関係性の中で行われる行為と捉える「媒介された行為」という考え方を導入して、思考力の育成のための方法論を提示した。

第2章では、研究の方法論として、アクションリサーチを用いることについて説明をしている。アクションリサーチは、介入を前提とした実践研究である。教育を改善していくために、フィールドからデータを収集し、それに基づいて介入の方法をデザインし、実際に介入を行い、それを評価していく方法をさす。本研究においては、社会文化的アプローチの観点から、会話分析と複線径路等至性アプローチを採用し、データを収集・分析していくことが宣言されている。

第3章では、本研究の目的と具体的な研究方法について言及している。本研究の目的は、社会文化的アプローチの観点から思考力を育成する授業をデザインするための要件を提案することである。アクションリサーチの方法論を採用し、データ収集をすると共に授業改善に向けての介入を行う研究である。ひとつは、日本と中国の思考力育成の授業場面における教師と児童の相互行為を分析することで、どのように授業が組織されているかを明らかにする。もう一つは、思考力を育成する授業を日常的に実践出来るようになった教師に着目し、複線径路等至性アプローチを採用し、教師の意識の変容過程を調査する。この2つの研究の結果と考察は、4章、5章にまとめている。

第4章では、日本と中国の授業場面における教師と児童の相互行為を会話分析の方法論を使って分析をした。両方ともシンキングツールを導入した授業であり、社会文化的な文脈の大きく異なる2つの授業を分析することで、授業場面がどのように組織化されていくかを明らかにした。2つの授業の会話分析の結果、全体の会話数は、ほぼ同じであるが、日本の授業は教師から学習者への“思考を促す質問”が多く、中国の授業は学習者への“指示”が多い傾向にあることが分かった。2つの授業の共通点は、授業場面での教師と学習者の道具を介した相互行為を通して学習が意味づけられ、学習活動が展開されるように授業は組織されていた点である。

第5章では、シンキングツールを活用している日本と中国の教師、各3名のインタビューをもとに、どのようなプロセスを経てツールを活用した授業を行うようになったか分析している。新しいツールを授業に導入する際、そのツールの使い方だけでなく、学習者の置かれた文脈に応じた活用方法を検討しないと授業に埋め込むことは難しい。両国の教師とも、シンキングツールを導入し使い始めた際に不安や葛藤を抱えていた。ツールを使用し始めた時期は、ツールを授業に導入することに不安があった。その後日本の教師はツールを使うことで思考が枠づけられることに違和感を、中国の教師はツールを使うこと

味の問い直しをしなければならぬと感じるようになった。それぞれの国の教師は、これらの葛藤を乗り越える過程をへて、ツールの効果的な活用ができるようになり授業を変革していった。日中の教師とも、それぞれ置かれている社会文化的な状況の中で、ツールの活用を工夫して取り入れるようになっていく、その過程が明らかになった。

終章では、総合的な考察を行い、今後の研究課題について言及している。社会文化的アプローチの視点から研究に取り組むことで、学習者の頭の中での情報処理過程ではなく、教師と学習者の間の相互行為に関心が向くようになり、学習者の周りの人や道具に着目することの重要性を明らかにすることが出来た。ツールの価値やその導入の意味づけを教師と学習者が協働してつくり出していくこと、ツールの活用を通して学習者の多様な考えを引き出していくことが、思考力を育成する授業をデザインするために考慮しなければならないことを提示できた。校内研修においてシンキングツールを導入して思考力育成の実践に取り組む活動は全国的な広がりを見せている。今後の展望として、本研究の成果をもとに、いくつかの地域の学校や教師を対象にした研究に取り組み、より実践的課題を解決するための活動を展開していく決意が述べられている。

論文審査結果の要旨

三宅 貴久子氏の論文「社会文化的アプローチから捉える思考力育成の授業デザイン：日本と中国の授業実践を事例として」について、以下審査結果の要旨を述べる。

本論文の特徴的な点として、次の三点をあげる。

第一の特徴は、教育実践者としての豊富な経験をもとに、授業における思考力育成の研究に取り組み、積み上げてきた経験が凝縮されて活かされていることである。三宅氏は、小学校教師として長年、授業改善に取り組み、とくに総合的な学習の実践において研究者と共に研究活動を継続してきた。とくに思考力育成に関する実践研究については、10年以上にわたり大学の研究者と協働して授業改善に取り組んできた。そして、さらに研究を深めようと大学院に進学した。豊富な経験に裏打ちされた研究活動を土台に、思考力育成の授業を理論的に整理し、多くの学校で新しい教育実践を指導していくことを通して、研究成果をあげてきた。また、研究のフィールドを国内だけでなく中国まで広げ、広州市を中心に中国における授業研究の4年間にわたる成果をまとめ上げた実行力も高く評価できる。本研究の成果は、日本国内のみならず、海外の教育にも少なからず影響を与えていくことが期待される。学校現場での授業実践を学術的な視点からわかりやすく説得力をもって現場教師に伝えることが出来るのは、長年の経験に裏打ちされた研究成果だからである。

第二の特徴は、思考力育成の授業実践を社会文化的アプローチの視点から捉え直した点である。伝統的な学習観では、思考は個人の頭の中での情報処理の過程であり、思考するための知識をいかに頭に蓄積出来るかという観点から授業が作られていく。それに対して、社会文化的アプローチでは、思考は個人の内側の出来事ではなく、学習者が置かれている状況において、周りの人や人工物との相互作用的な関わりによる「媒介された行為」と捉え

直す。つまり、文脈から切り離された思考スキルではなく、周りの人や人工物とかかわり合いながら思考力をどのように育成していくことが出来るか、子どもとその環境との関係性に焦点を当てていく。

これまでの教育メディア研究の多くは、新しいメディアが導入された時に導入前と比べ学力がどの程度高まったか、アンケートや試験で調査するものであった。しかし、こういった研究では、学習者が新しいメディアとどう関わり、学習がどのように進展したかはブラックボックスの中で可視化されない。三宅氏は、学習者が置かれている文脈の中でどのような相互行為がなされたか、「媒介された行為」として授業での会話分析を行い、児童の思考過程を示した。この点は高く評価することが出来る。

第三の特徴は、教師が新しいツールを導入するにあたって、どのような過程を経て日常的にツールを使いこなすようになったかを明らかにした点である。教師がシンキングツールを授業に取り入れる際、不安や葛藤をどのように乗り越えてきたのか、インタビューをもとに時間軸に沿って教師の意識の変容を捉えた。教師が授業を改革していく過程において影響を与えたさまざまな社会文化的な促進要因や阻害要因を図示し、どのような場面で教師が悩んだり、不安に感じたりしながらそれらを乗り越えてきたのか、成長の過程を示すことが出来た。

思考力育成の実践は、テクニックとしての教授方略に焦点が当てられがちであるが、単に新しいツールを紹介するだけでは、授業改革は難しい。新しいツールを導入する際、教師がどのような困難に直面し、課題解決を図ったかという過程を明らかにできれば、これから導入しようと考えている教師は見通しをもって授業改革に取り組むことができるようになる。研究では、日本と中国の教師の導入プロセスを分析したが、それは国による違いを比較するというよりも、導入初期の教師と中堅教師の取り組みの違い、および教えたことを正確に記憶させたいと考える教師と深い思考を促したいと考える教師の違いとして読み取ることが出来た。この研究成果は、今後、新しくツールを取り入れようとしている教師への研修に取り入れることで、ツールをどのような段階を経て導入できるか、どのように不安や葛藤を乗り越えられるかという観点から有用な知見として示すことが出来る。

以上の点を鑑み、本論文は博士論文として価値のあるものと認める。